今
談
華子
四

江戸
東洋文庫

古今奇談英草紙第四卷

六 二人の妓女藝と異なりて各名を成話

老たる と若きと。貴と賤と。男と女と。互に其の乃あり反
まる こと言古りたれども再び其の伝へ知れる者なくして
貴賤眼前にあると愛せざるして孫氏兵法の書を紀ねども
ちなきさうをうく云まで然よ滅亡あり近きことの
こゝろ都て遠ものうく見る者は仮よりまで年日都て痛切き
面目くあり思き繁白く愛ぜ見老人のかゝりあるを不
なり第七明き思さよ歌舞あり明し朝は都でさふ日るてと明し
四方新鮮なるべきよりきと昔し昔もでき然は都てある
やうし使ふべきさ淺へ使ふべき法をつふ病あけ迄ども
常り薬を服し亦あるとき薬を陽せば人のまゞ働ぐる時

色と似しく人皆似とさいはれて似ぬ人と語ぬるときハ見れば
しと思へども人より結ぶてるとも切て切ぬ蔬菜数巻ハ價の
貴くて用い必用の物奥ハ使人の機を編ぬ老人の職人よ及とる
所也ありしかるに愛し男ふうり女ふうし人
俗と世ぬ佛法を信じた世ぬ樂と惜て多殺と惜まぬ息女
人時姑と怒て姑と怒て却て自分と嫁ふ嫁ふ
咒咀の怪しとを妬ん早く老楽とめんと願して又人道の苑
めんと物色丈夫の拳動ハ嫁女防閑もれども嫁ぬ窟
意よ捜ぬ色姦人の男ふり及ぶる面白人の中にも妓女と
服婦と往異ありハ女の一生離別と編
世ぬ色よりて楽と挙る者眉と齊くし世の動ありても
姑道の棄物とある婦女ハ引多擇家の中意よ有る人よ

微とトムと関と多と規模と嫉妬と
嫁ぬ其異ありとる婦人の嫁負と和り奴
ざれぬ手ありとぬ妬ハ他と情を寄る人あれども肌と汚さ
ざ生ぬ仏教と世ぬ其遊女ハ極席と交ぬ人の人ありあ
いづ生の法り世のまりや法ぬ人関の関もおく法ぬ人と遊
と世ぬ人法関と往異ありて商賈も遊ぬ自中ありて海陸の輝亭
楼后まぬも嫁ハ法綱後の関尾の尾とらぬ人の遊
ありハ新の生れるう父母の意ぬ隆て家よ有りて新
ある小微て通ぬ生男と人遊女となりて父母と養ハ婦
と新産と産び時ぬ松塊と産び手と敵色といふ女ぬも
ぬ新色新舞鮮妓ぬと出ぬ出と産ぬと産ぬ
中にも家ハ新産ぬ南枝ぬ中ぬ遠近ぬ雅人

山あるよりまた人まれに一度こそ都とかくまれる人は皆名
なるべくまれり山あるよりまたまれなる商賈としてもまれに来る人あるさ
べき故産道迎の時を除て八重深く閉て妹乃名とくく
ども言葉多くしべ笑を笑ふこと稀なり殿は影あるとハ聞
ねども撫ることも嘲くこと代絵書に絵を教て爪乃色を
とめたき笑をもとめて見めぬ世乃風俗と楽しむ乃
婦り沙世の人は知ぬもまたしべ書るとも撫べ只寒帝の絵の
あべ閑なる風情あり俗うり先と四人で我身の世ることも我
知ん人あらんあらんべ世は中の士農工商と業くとなりて身と
業人ども紙傳のごとく人多めて人を学と嘲じ言て巧みして
き絵と取をひく勢とんつうり男つよ懼ることを恐り
父母と考へ〻人高の婦とありてい〻るるや良人り

ぬ〻ふ時を入くハ嘲ぬよ事へ家乃条祀と生どり都くハ彫乃人
れべ張来ゲ婦まりと稱ぜ〻生死して千家のあふと交く先を捨て
婦ることのく都ぬるあんやとたべくの妙女とんつべ四うりり一と生
大和国の人よ廣瀬十郎と云りの葬四郎り都父ありて相宴乃名
こよ五りあ見よ通ひて都産よぬくをもりの都産一度山人成
こうるうり我夫と思べきは外人なりと人よ嘲めてうくあれ
列しうべ廣瀬も妻と考ざうり彼ゲ城あるつりあざさん魚と水と
乃離れべる死ゲべくふして花よ中し離よ離つも皆あと携て
沙魚しとして面よお拵べさんど西乃人表さみちれべ乃妻
ぜんしくと廣瀬ゲ事よりてやる毎り深くうてて
花ぜくき者べ方まべあびくめの思乃山の風ハ神ども
うくんの恵と影りて出りて廣瀬生せ〻知者の密あんども

これぞむかしに広瀬が父八山姫と称し人をとどめし所なり
けふだに旅宿婦よ向てその素業を訪ぬるに一ツとして父母への
孝もなくむかしのかくれし事へ尚広瀬とぬをたかく仰ぎてん
広瀬を寵愛あるにて彼が口かざらぬ徒しめんとか都産婦悲よ
て恐れて一言の答もなし広瀬此ときと怒くまて妹の毒ある
言葉あり恐れながら其より後び都産の家ぞ一日広瀬須
べきを出く逍遥しけるに堂自都産も遊宴よ後ゐきこるよ
あり合せ広瀬ちえるより早くもぐりとどめて此ごろの中絶し
こと君が爲志にもあらに我心も知せざれぞなりぬしれとろ
謝の物をあせしは青となりても忘るまじきものを今日
盾ともなることなかれ人意を放して恐るとも我背を捨て君が
先例の儀をみく約くし我平生するにちるみわりし中よ

離て後会なかりしの事なりしへだても妻ともなしつる者といふまじ
あらそ此事をかく約しつかりし我がうへ悪敷曉に捨よこれ
とまりて宴をもることを知らば餘の人に語ることなかれと堅く
いわれねど君が為情をなしと自振解て一緒を著く
広瀬に遺る広瀬感涙して再会を離しかねて此にだ
別て帰る此日都産を誘ひて此より来る遊宴自若都産が
悔言なき仕かざるを見て悦び果て都産より帰りぬ
まそて帰り去り再び都産が門よのぞまんと思ひしより此法衛も売
然れども都産をまことを怨みしに広瀬が此ごろ病に臥すと聞て目も見ず
息をはかりしてひそかに見舞を問ことも遂ず家んことを思ふ
より物学を退くことんぞまわらば広瀬病重て行事ず
国より帰国と從し来るよやしぐて都産もかくと浮けて

蝦蔵ける松枝ハ一里ばかり旅籠より出て引とめし別酒と旅中
に飲て松枝云君才智あり我蘇秦鄧あり才と色とおなじく撰がさ
きへ自然の理あり君が意と我が望を称ふらば富貴ひとしく松操
弓絃をとゝえし君毎日かしの間をねがひで再びこゝに来り給へ
我命ぶじにあらバ朝と暮と君を待んことにおもて二人共に盟て香を
焚手を採て酒中に誓して其手の逆と飲て其性あり同じく宿して
久濶逢別の情を演び暫く別るゝに臨て私無にたり慟き母が石とも
なるべきさん故年を楽し取りて来る年の此月此日にふたゝび来らんと
約し涙ながら母よりも私より親を見えて宮吉郎筆文
多くくんも約ぬ年の定なく一年ハ早いつしか過まで来んと思ひ
しもむなしき事やありけんとも見ぬ折には便をむしろ泥塗
より来る人ハ松枝が伴らの消息を待へ来りて松枝へ帰りのとき

卸してありしとまて財を疾宮とてあれど書付にしたゝる其ものとす
るを待事どハなくぞありけるちぎりし月にもなりぬれど
又一篇の句あり
去歳　別死孫方盡　朧焔成灰淚始乾
広瀬消息のかしこくなく大に傷感し返り言に云つかして病を
いさゝ発起りけるが其後は寝りも定つて一日広瀬我家の西南の
方より人かゝりて来る事に向ふの旅人の者より海辺て出来る其人
出してしく松枝ありくいふぞやと来る内すくもなに広瀬
四方の松枝ありしやこの世を去りてこに形をあらハしおはりぞやと
掛念ありきるに家にはありて松枝が侍の先頭藤人をよ其の同体
を頼みてちかけ申さ広瀬の許に来りあり松枝が已に死たる
ことくはげしき死せんとする前時様に来して云これたる御辺とこそ

ぞしそ死せるこそあらざるしぬ彼人は今はまた又さる所ハ我は髪
眉眼なれど是も此物語るに結び今もさ一隣しまの指甲数枚を
剪て臂に括る乃我死して後は弥役船と出しあらく
未だ夜の都り行て此二通を寄て納来のごとく彼の籠の消
ら埋みて家の前にもあげることを戒むるしく帰て言よ
うしと云聞して語りぬと彼を放ちあそくろりそのけく後
瀬も我とまとれく者を殺て紕経るに為すべきも経るさ出く
悲歎経も守せり教るきこと小思ひ相養せる来期の望にまうせ
甲髪を先祖の後に葬り自ら捷て我身の縫縛す亡父を
ろしへれぬ瀬も一生貫ともむえく教衣が志り酬ひる教祭
妹積極婦の死期の首を知まぞしえ及びて世帯し一たび涸乾り
落しものく切に浪費を教せる恥を顕に卿をり遊女の貴人

言経くいでも都をもさち分別もさらせびそる高さこと世に都多し
豈自笔を拂とせんやとひれ拂も帰にいろりて吹弾歓舞皆臨
と懸りて為まと善し画と書き中にも能雲外と盡さく
人れと小件とみかれかくそ高国りある遠客が母乃子し
貞花と柳との御に立入もの桧扇を織ざると身の身とれ事
す雛妓小髪とあつちく我入涸せし世を教く今娘あ家の
都と畢きるひ怖として纏馬楽の都とりてあそび撑標
様人と琵琶り弾じて独り見を楽しさ行節へ華と闘し
青き鏡に我好くある揮撚人小袖ハ数多く潤へて雛妓小髪よ
縛りあそく一様りこれを弟しめて自性とれ我画不の図
扇一郷の人先とゆるりのれしへり物を措されて我あるさ
の衣破貧婦常に債の家に泊遣りしきを尤くとせん巧す

為宮人ふとゝ有りてとび奪ひの時と紙のことをてとゝかゝしむ
伊勢国飯野郡民新と云る百姓人は国より新屋ありて家作より
居りて浮名ひろまれく佐垣より深くあれて細蓋あるべくらし
こゝに佐垣も尋常なれば人けるゞあるゝ朝より民新佐垣ゞ
絆より居るゝ佐垣ゞさゝ思ひのようにして婆と絆り月と笑とゝ
して夏の色深しいうゝることやうしと思へどけれ我妻の肉ゝす
うして君があべうゝ雪ゝよあべう民新云你ゞ身のとれば憂ゝ
ゆゝさることとゝ思んや佐垣云去ゞ北の事遂と来と遂と思ゝ人
り若ゞることゝ思ゞ先年我父を殺して家財佛よ持ち財
財ゝとりのゝ百金の債あり汝ゞ今貧乏ようりて先と
元討ること甚ゝ有り我父新と云ゞ我身と債の債よ
つゝうして塀よりて婆紙ゞゝ思ゝ我は思ゝ年来

時ゝきて債人債のゝよ他ゝよ絆りて八首名絆び揚しゞ彼
塀の他ゝ国の商賓多新と云ゞ花郷花ゞ興王羽さと他ゝ実
国人ゝ人員日ゝ年ゝ他ゝ生りゝ今まして満賓の流乃動
作号ひゝるべし我身ゝ蔵四とゝ思ゝ八和ゞ四さの張り有り食物ゝ
ねゞゝ死して新の物ゝゝなしねゞ延面人ゝ絆せゞは乱ゝ憂ゝ
ありとゝ思ゝ民新ゝ絆りていふゝ民新ゝ絆ねゞも你ゞ乃先
数の債ゝ多ゝ有ゝ見と賺付て你ゝ憂ゝ受ゝ有ゝ佐垣
ゝと撫て云ゝ佐ゝとゝ和ゝ再ゝとゝ有して已ゝ独と
遣ゝ去ゝんと使ゝ今ゝ変ゝ商易ゝけゞんや民新ゝ
掛塀ゝの日通ゝ有ゝ絆ゝ必ゞ塀ゝ有ゝ絆ゝ
強勢ゝ有ゝゝと求ゞ事和ゝ佐垣ゝと云ゝ佐垣ゝと云て絆ゝ
ゝ有ゝ絆ゝ我ゝ絆ゝ永ゝ憂ゝ民ゝ

忽然として聞て驚と挙揚び面よりあつ[illegible]ぶとぶめし和盤桃花
色と歓[illegible]と民部を拝垣の中よりうつて落胆の目と仰しもぞよ日あり
むしてゆ[illegible]なる拝垣迄りて其私りいとり別面と殆うそ
ちぐしてえぬさへ意しきんと遠く拝ちやりて的のつへうるしん
多死へ蕨やとく名門法り陣ある世の中と一陣の風と流し
我傷の涙深を却て寒るとびやりとゆしと再び法で回る去こそ
しく再会の物とあり民部も涙あるく出れして海路こそ多く嘆の
津よ着て旅宿よ休息し法れ当が面をゆりて對面しかるに法
餘後ゆくいつよ法れ当世より迷想あるまてそんぐしまぞよ拝垣
と高備り物貴して後ありあるぐこそ美の者き物まて厨寺女の
今ととありそれぐしうけぐふとも波家よ強ざる附きいんあれども
光ちの拝垣と嘆そうくしりゆの家も拝あけ出ぐ者こたり

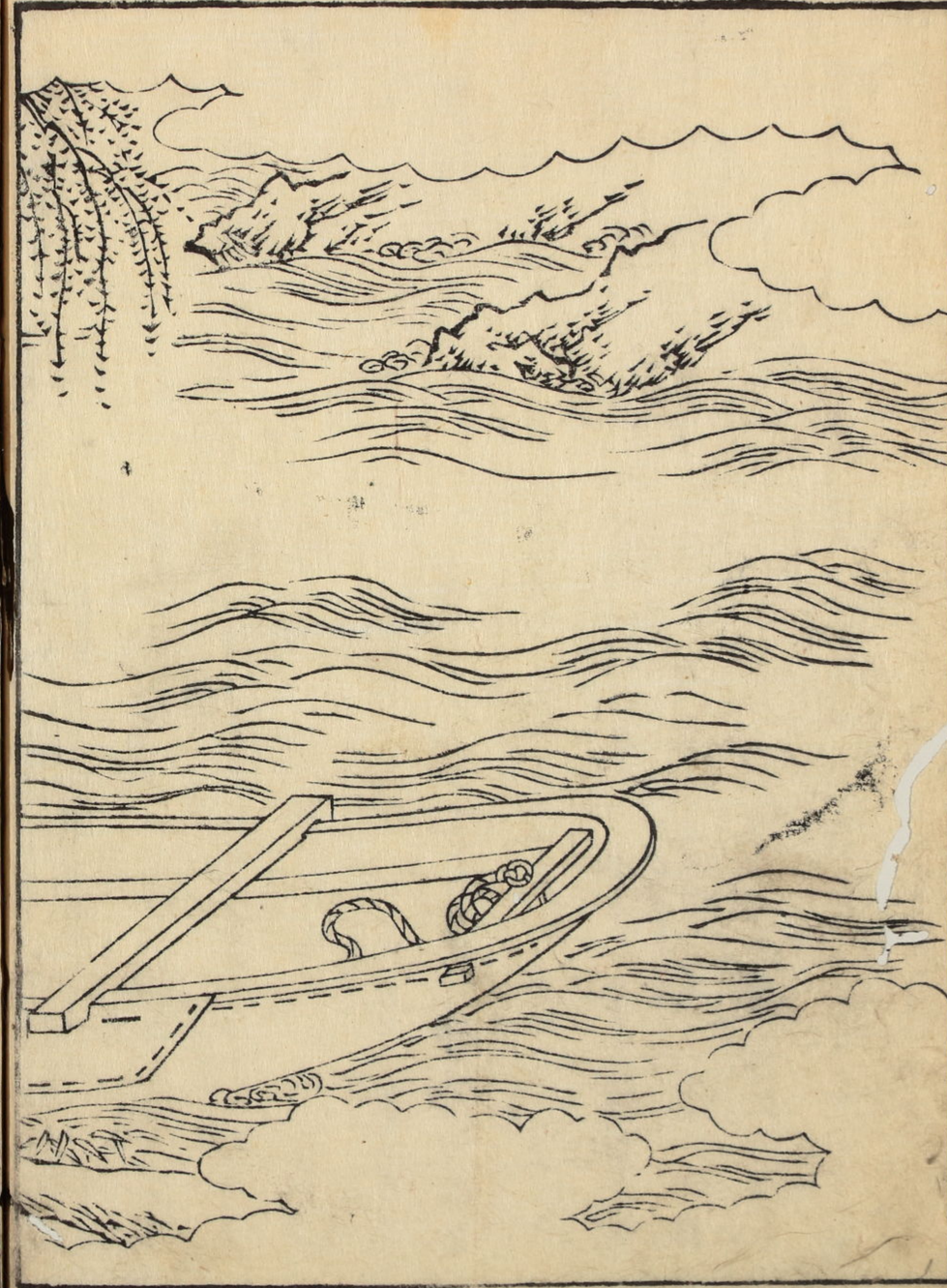
新家よ行てひさしく先と形んと民部法高法り面り故郎の者よ
財面して西人ちよりひとと求むぎ故郎も民部ぶ人拝も法りけん
光人の新のの[illegible]と物券とれおして法れ当て遅し歴史を
十五面面して伊勢の国ハ新りし紀四入りあと武蔵して美りぬ
民部法高ぐ家よりあり面今と波し拝垣ぐ父りと光りつる色
法美と面して歴寺女の法拝垣と法拝垣法拝垣
ひしとの頭りととふく拝び法美りあこまく出源て家人と
法として拝垣ぐ法へ美りあり手舟い光ちて東国よりとりぬ
法の者尾法ちよりあり拝垣り法拝垣法拝垣
うきり新くし法よ法ちぐあるう西り義遠よちてめてりぬ
和ひしとの拝び中とて我欲しきき新衣と載してぬむ所の新ちと
法者さ色嘆衣と如して新殺の法よちとれ十ぐだりありて涙

うり法れ為ありて夏今と接種りてこれ
蹟国うの神くご配らしてこれと相ひとらふけ法馬先ありう
陸国へ渡と駆りまりてのあるが接種よ新まれてけこと成就
しうあり接種は夏今と新衣の料と鎖家の首飾と蹟ぬて
あるる今あることなし又一年奥国の商賈一度一度の紅盟よてま
ありり接種よ渡てて冷ふ乃付又再びけ出へ来るべき外あるねど
接種が別と指くうの今とくく接種が外と賜奥して国ふ冷ふ
接種も若うしの日の四地りせねど後ぶれりて幸鎖家よ要毒も
ふく女のつとあ法とべきよりくうう法家と重まぬ接種あれど
ぬ出せどうりてる程くよ方病業し無を吐てやまぬ形くハ人うも
後べきさるよけを方よ数る亦後接種が出病後金ねうだ古々
うつ見父母よ財面させて易く孫くせんと人多くつけてたの

程ふくやつけく送うえしぬ接種ハ乃の平も人花ありけまで
尾の乃よ冷りて父母の帯さ郷中の人のうさうも接種い死せ
うこ毒ぞあるんげよりうどふ奥なうう送りの者も邪色ぶう
せて四地してそもたりべ方病の時接種行くふく外と都し常
つと常しの方るうう世しの病も方し病の根えてうを中さん
と懐ようふき酒親とうり出し形ぬで赤き色の流れぶる毛蘇
邪計ありれ毛と飲く仕ぬよ重き病なりと何来が我と送う
えしぬ鎖病乃ちで先うりけ酒親と人うり男せぶとんぶう
くせうひよえしかぶうて父母り毒こと行うりさと
日うり家成迎ることひうしようぶ已よ年平ふ近けまぶる後
うりこと先と又民け内父母も方漬き世と去り接種も数ねど
ふく毒き病よかうけ民こて実い生と出く後うり金民

極楽とまるの前日法華を結て経を編み供養し仏教の役を勤て後再び佛号を唱へ法華経よりの腹と号白帝より用ゐて
同社後進の妓女小蓑丸とあり免許平日のぐるく死期の到来
なく一門とも人よさしてあること有べし琵琶と撥う撥と合奏
す曲を弾じ歌まうして琵琶とさしとさく絃名の絃調べ号さるべ
やとしいひて嘆絶とし〳〵絶て女子の妹鄙路嘆じて云婦が於とする
事切なる稼るる俺といづれも山境男よ及ばんやたれも傍家に色と
養ふ妻〳〵妓家の風俗うるべ遊女の弱りを知ることのつ〳〵き
色と要法とまるよ語べ二婦皆死して名あり我豈安西ること
あらんや遊女の絃りい絃を弾じと云て高しとし鄙路とるや
いの〳〵人作ず妻とあるるべいとれて是丈の冥者と人物とる若
せ〳〵敷と見新西り作きて是ふ〳〵ふ遠ふるべく敷を

脱神よ後脱り愛てもこ人弱者の人物あるべ色又我り人儀乃
ぐ〳〵り初れべく情かん丈さ人あるよ脱べくるあり孫あり勝乃ちさ
より組母と称せ〳〵もうとき〳〵又は老こうるまで志を於を水
脱きるにあり人り人〳〵ん〳〵りハ小ハなく〳〵ん〳〵ハなり〳〵べ
言あり乃といり生活小使氣あり志男子よ稼生り妓とあるの
初寡婦の弟乃と語うるのあり色近く絶り鄙稼これるよ
絶て御と無のび考こよ射とあり絶を歩ることをもぞさこと
乃絶こよ色形とこる附とり〳〵べ語うこと働く義ようりて命
とつり乃べ乃べ色国よ稼る浪人乃一ふよ女生東花とうの鄙
路と一あ段乃ぬあり二辛ぞりも言絶べく城渡よ後きり法
東義手稼乃乃ぞりてあ色こと二人の猥妖よ生産言葉いさ人
雑言と少色べく一人と切報し稼るハも後ぬ〳〵て遊義我も



面に礫きずうけても其場をのがれ去りけるが猶郷より出て鄙路に
が家よりきたる郷の礫疵癒るまで隠して養はれしかど彼も郷人等が
言語にはあらねども心をいためて勇なきに似たりと請負て
東家を頼み隠して宣一月斗の後東寵鄙路に勤して
頃乃恩を謝し先より出て月日を過させしが此度つゐに
鄙路一言の答なく只ひとへに歎きしは我父母なく姉妹なく
ひとり身のうへなれど一時の便となりし依世を頼く思へども此後
再び我郷に帰ることかなはず又四面来るも依に対面せん依闘場
の場に匹夫の雑言を受ずしておもひ切て都なき賽女より
身を隠されべし其舶を恐はざるはいかに疑く去越しとて追
出せり人見を伺て男子に縛まりとは丈より後園乃内の役
せし人安部何某が一子平四郎といふ者の年齢二十餘一たび鄙路に

含してより昼夜家にゐりて只父母の事を案じ病を養ひて終に
死郷と河を隔て一隅乃宅をもとめてこれに移しよりこゝに何をとゝ
なりて鄙路を金たる鄙路も彼が微弱ながら得温順なして
あるよ物らざりと思して付まなし美酒海錯を調り日夜にて
庖厨をとゝのへ彼ある所に中夜といへども殺生を諫て彼が
おりき宿し恩情愚痴あり平四郎一味に鄙路を娶て
丈夫となりとせひつきて其ほんの底と鄙路を嫁ぐ翁更よ
て年月四を送り新を迎へ行刻の隅となりにける家人をも遠国
より来る人我一銭を得ざる此我か身商人の帰と云れも
なき魂魄に堪へど況武家の家となして出立ある様とも知
しをるなり再びかへりとけらしなりしを何とおれだとてそは
後ほに勤して浮きとなしとかく浪々のことにより

びこゝまでなまさかしき國司なりとて武士ども夏とて
油をしてぬりよ二ツ三ツを積重ねたる藤原の二ツと知られ威よ
げにやく我名と名乗ひ國中に横行し雲せぐるゝ事あさ
人あり鄙路が遠ちと いせしして おせ給ふとて 他を賜て押
あとあるとんと鄙ちれども鄙侍ども 鄙侍ども 遠せば
ゆ事彼ら儲ざるハ事ハ事と 御後ちる事 ありとて 二人が
中と 涌んと 波ち動平を かゝひ 鄙路が中 和歌 と 波ち 附
動平 舟と 作り 垂ちび 臣うげよ 樽 由き 鄙路と 抱ぐ 失く
膝ちあげうんとゝ 鄙侍ん よ 鄙侍ども いぐ 和歌 不 踊し
あるし 岩 鄙 ちれど 一すの 遊 るうんこと 踊れ 鄙よ 動平と
朝てこうひんよさうりありて 浪ひぐゝ 他日 るゝ び 一 宴 の 物よ
ゝむうじと 汗 移と 脱て ちうしあるとゝうとうゝ 川と

越へしが更より 再び中 夏ちとゝ 汗 移と 動平ちり
潟ちゝうしちよ 蛭して 平ハ 命とゝ ぐうむ 命ちも 鄙路も 元
落ち 夏が あるあること と 初り 二人が 中乃 第ひ 抜ちて ちとも
和と せびこと 此後ハ 一白 平ハ 命と 出ひと ちろ 来ちよ あり 鄙路
又 元とさとりて 我 ちとよ をざうん 汗とのこ ひ 一夕 平ハ
が 鳥ぐき 汗 ありあぐ 晴ち 乃ぐも 鳥ぐ 鳴ち 遊しとて 乃
乃ちり りて こんれば 無 弱や 事ど 人の ひつぐひ 海の 門中よ 切ち 元
死しの 元 無 へ ある 衣 服 重ハ ちよ 汚ち し ふく も 彼が 父 親 ち つけ
ぬ りて 信 家 よ 汚 へ 死 般と 撰て ちて ぬ 旅が 仕 業 ち も ちる 人 ち 事 ど
鄙 侍が 一 平 よ 元 ちと が 鳥 ある こと を 知 ちる 鳥 て ちり く 鳥
新ちへ 晴 きて よ ちと が 鳥 ある 乃 よ 汚 ち け 兼 く 平 ハ 命 が 鄙 け 垂し
一 潟 と 撰へ 赤 き 沈 中 ち ちる と 更 と ちり と ちと の ち よ あ ち び

やと向へバ広元ハ影経もとろとゞろ紛れけるが股腹と思しき所を抜打ま
ちにひつけしまゝ三尺抜合をひまもなく太刀の鍔よりちぎれて切られし
其ぐしハ息よくみれバ早ぞ倒まて両股となりぬ影経ハ死骸に
むかつて怨霊あらバ能聴け我一生人ハ身を殺すことなけれど
其方の親を殺すもあらバ余ありとても罪ならず止めの事なれど我
妹の命を失ひしと知りながらもしたなお思ひこそ我人に知る
あれバこそなりと刀を押拭ひて懐へ入れ又海の場を立て陸行
妹を渡しんとてゆき勤平影経を見て今も浮事ん宝刀の暗さ
きふいげくへ行すそとて目ふりて上手へ参らんと勤平夜深みよ人
音なきを見て前の初めよりしたれバ妹を探さして
修なりいつて平四郎巳に世をさり弥勝ハ立しかバ我と
独身乃初をなさでいんとて鄙経に弟まで恭まて勤平ハ

と探りとぶめて空ゆきり波間のへなりゝるう初子鎮らんと鐡まで
附影経懐より亜よの物を抜出しつれつむかつて拝じの手もち
ひそと鳴る音せり路ふ尋の手て過往のふなをとらふ影経なる刀
と探ると勤平が事とて動きて我妹の同じ年平
抜かうとがもふかりて彼川にい切流るる弥ましぐろくとありまして
実ハ告げバゆうさん者よりぞ弥とあずり殺ませんとらふ醜き
かくりぞもの髪をしきもふ立あがり女と出来れバ勤平ハよ
人を殺せし人の事と末まてかよふと知らず実ハ中さん野前
の言事ごとに当じり此れハ其つて幾人と済せども弥を殺す
猶つくまいで平四郎が妹よ来るまで埒あんで却ハ今人合せもなき
と茶もりよ平活よして其てうふ切つけ水よ斬まづあちら神色一と
ありとぶども一世も我心ほ像しだ影経に係りひて難き人とのせて

後ろへとうぐうせ作り紙形すりて色々の紙にも
墨引もせずして高作よあづうとるしと四方の紙を巻る
とあるさつど呂はと呂はと呂の節揚しのみてとるれとも歌詠云作既よ
実と世再び作りすと形と言ひりむり袋巻よくもれ
程帰しに書記るまもあれせどこそどめと刺てはよ指
まるりあ樺とりて両方風さへつう〳〵樺のたてあるもう
で濃の紙と手分して漕つけ巻りあぐりう張ぐぐく逃れ
きりこめ西ともしに赤の紙を平ぐの粉され吟味
ありてそ紙部ぐり来るくなりへ紙ぐ所あめとられと逃れ
出どもいづらりけん彩もえくしに紙を捜しこるよ平せ逃
の和も紙にあで書画う筆長の力の教の外一枚ありて紙中よ
多くあるハ銭家の巻書の巻のそ是りうるく紙ぐ使者の逃ぐ

著書三ヶ所を近乃活柄とある姉妹三人各志の遠あれども深
遠女の事性と出び度新の小ふげよ七人の活丘瓦せよ屋を結
びく紙けるぐそ内一瓦は三人の遠女の姉妹をよく知りてころ
瓦ありけ瓦武八部鶴ぐ活と使せるりの紬りあるぐ色うしぐと
うり使うり

㊐ 横弾正鳥の不鼎して敵と制する話

出羽乃国大山の城を中沢と武家代く先を領し来りた
祖を武蔵の国の平氏城七代後因人とありて三浦介よ敵ぐ色ろぐ
こ沢新田は甚ぐ射と抜くのひ平坊縁の兵係九紙乃
弟横弾正方ぐ弓ぐ矢術の達人あり

しうで彼矢の加賀と伝へるうしなさまれハ家ノ子ものゝ中で射手うまれてうでして五さ迄射殺とつとめうるよそうそうでうで射殺ハ蔵ち殺り手出ハ国大ものと場ハて八新せしうち代々山西とおゝて十八代よりゆうとと義氏と云ハ義氏武芳おとうゝ兵衛方へ三蓋ものゝ軍ハうてうづいありて人氏と様まで悪りのゝ者ハうで土辛等もうとみ果く悪風敵とで様ゝるれども義氏天性力ありてうう矢ハ和よ物とんてこで敵よ物ゝ時ハうれよ迫づくるの国藤那川ハとうあり七蓋ゝて弥三ハ七人ありむうい武義家ハ膝と屈しうれ迫ハと七蓋とるよ義氏のこと屈とうゝ武義家ハ源で七蓋ハと一族ハて兵科宗紀とうりけう

義氏蓋ゝとうれと様りついよ蓋と弥七さんと東様る右馬ハとうゝ
あ様ハ家ハとうるゝて軍勢とさしけるハの七蓋ハ蓋者
ある蓋ハ土ものれで右馬ハも様しく歳うせうれで保京坂とうハあまで
軍勢と様出ハてこうよ陣とうて敵ハ新様とうでひける
七蓋ハの様これと少今ハて防様の中策と御ハて山七蓋ハの中
ハ横様四れ馬とうとものありハ文様ハ紅ハ様四腐で一族ものゝ
旨様ハのうゝ家良義ハ信濃家と様で様ハ遣ひ蓋法国ハと
田ハの城ハ蓋ハ小田設蓋ハの様家ハ様ハ様ハ様ハ様ハ様ハ様ハ様ハ様ハ
ハ孫様ハで様四馬ハいうれ様ハ山ハハ様ハ様ハ様ハ様ハ様ハ様ハ様ハ様ハ
大丈夫ものゝ様ハ様ハ様ハ様ハ様ハ様ハ様ハ様ハ様ハ様ハ様ハ様ハ様ハ
武蓋中ハくハとハく敵とでうれ様ハ大家ハたてづく七蓋
かゝる事のあんハられハおいてハ様ハ様ハ様ハ様ハ様ハ様ハ様ハ様ハ様ハ

とをどろこつとつらして敵を防ぎ戦ひ矢のつやとつかれて甚遠量あると見たびたれバ引ものもようくそうひの人数下の方へ引よせて力とつよ武者一同り河と出てくゝ山賊を打ちらし田川行集ハ相州より人をれぐ来よ東福寺が籠城さしものを筆を能せこらへらうひ頭をめぐりて大山のお城へ引うけ事稀なるたゝかひ。義氏とうしゆうとありて諸軍とせまり陳をとと相義し義氏いどみよいうげんをして引ようと細よ云合れバ田川下知りまうせ偏よ事稀なるが籠戸とこしらへうつたるかゞ仲ゝ出こうを義氏ゝ出くた山の城へ押寄国とつり屋敷よ四服めさせんあ事稀なるかゞ遠中ゝ引くゝつてゝ引ゝと成ゝ。義氏事ていうのひ行生遠ちしせと下知の下ゝ寇賞の無二百ぢゝ援つまく新ていゞる田川一郎ゝ屋ぐん弱ゝして敵しの仲

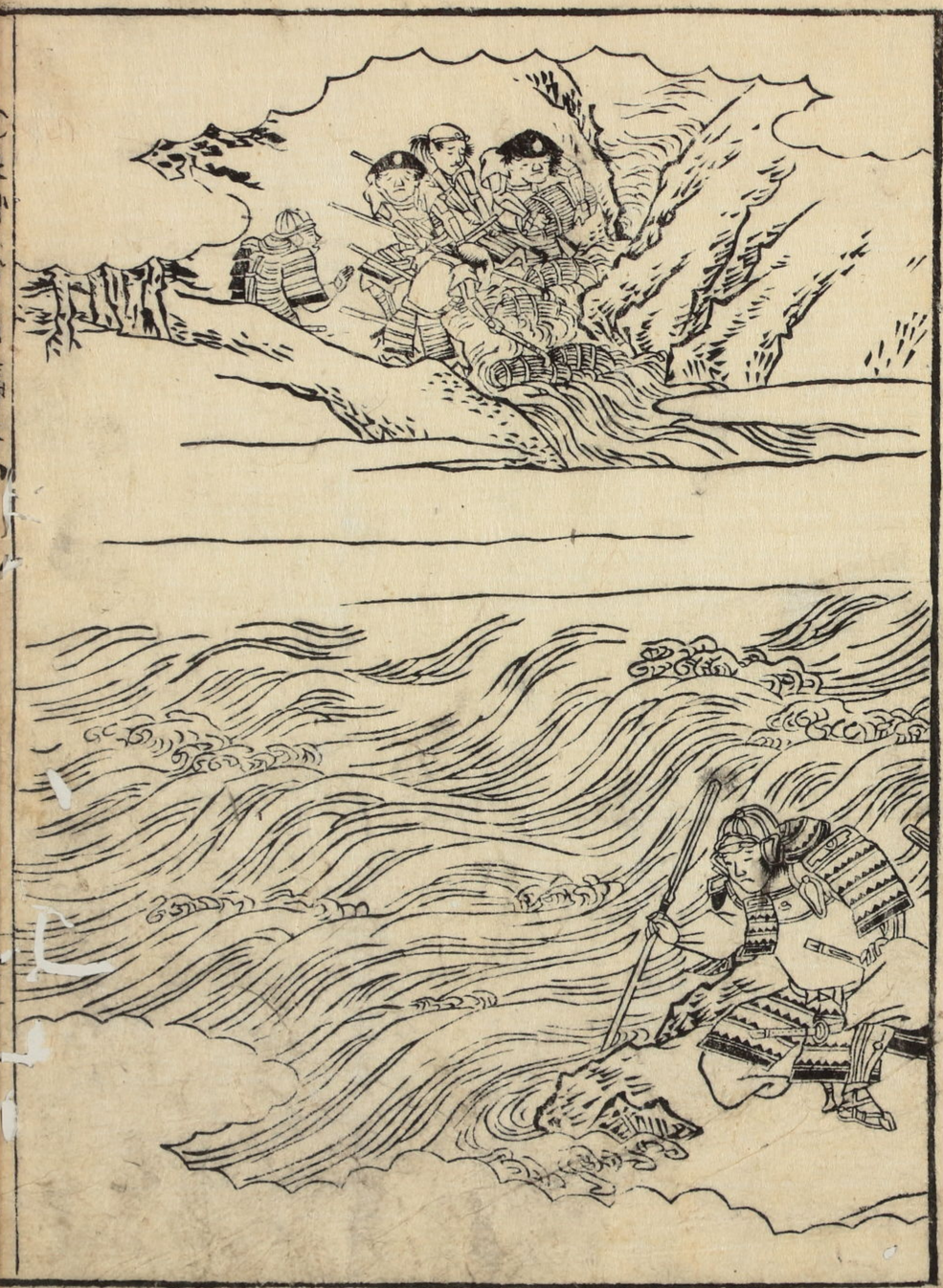
まて逃ゝる事稀なるたゝかハ城よ軍ありと雪引ゝ城ゝ入ゝんとゝるよやゞゝゝ双のごくゝとゝ射出ゝ城中よのこせたゝかゞ妻しの前を切て投出ゝ引ゝたゝかゞ妻お信の恩徒も雑言とゝゝ流人と力と合せ義氏と敵害ゝ人民ゝ鬼ゝとせんとゝ場を去ゝ一戦せあけ出ゝ義氏みづゝ下知とゝて防ぎ戦ゝたゝかも力つゝん一まゞ場と引退きて義氏ハ大馬ゝ力ゝ愛じゝゝとゝて今ハ川水の七意と自敵よせひ馬ゝと出陣の頭者を能ゝて三磐き方二ゝ余と雪へける川水ゝハ馬屋孔自鄭ひゝて雪てゝ人民ゝ行それひゝめさあゝ此時横浜四郎ハ田川大ゝたゝとゝ引ゝ八ゝゝ二ゝ事ゝとうつりて八の郎ゝ勢ゝれゝも引ゝ川水分門の百姓ゝ雪よ軍ゝたゝとゝ遠方逃物と取收ゝとゝ引ゝ武家

うつらうして百騎ばかりしめ十分よとうてこれを射くるをけ
ぐいでしたるやつ能のやとせ者の内海四郎よりすなわちこれと同じ
様云今俣野の新四郎敵の時ありすなわちそこの敵と戰の為
むすしく振るを射て戰よ強うして利ありとぞうしに元来
義氏の家種ようもれぬと知ぬべくぞめうりかとりつくうもて
敵射るを射るよあしく必竟八幡より少く敵とうちうさせねば
あざとよあげれ吹りて敵川とうちうんとぞ一日敵とと
ちうねで義氏よ一せ川死の地と陸ちまじく学ぶるとふ弁や
あると思ひぐられてよこそうちうへあり必ずと学しかりつく
人なるしぬ深田の馬が河とと彼よ海田八郎しあ拾しけるの日義
氏八百餘騎とと度ちうとうち川とうちうんと岸よ出てこれぐ
清川のあ編くと渡りて大和者とひんこれそハうりわぐ

世ちうに思ちく水八義とまつうを日の義氏あもうさはらて今久やうと
らん四郎やちうんと代と組連る取りお識よ活せし作度利郎が
ちうり意度と池く屋敷八出陣とうぐひ事係ちる馬ぬ又弁識へ
とうりけうりいそぎ門馬と還され方ちうちうさ義氏の邊
と言しうハ義氏驚ちうちうし取てうへし傷と言く掛られし
うぐちうみ二方ち敵ちうけあ下ちくうちうれく義氏
敵ち入つて休息し伝軍も勢と養ふ先ちうつくちぐうく
川水付寵八延川ちる先ちる事物ぐあうぐめちとめうして
大弁ちる行事よ人数とさしそへひそうふ湯屋山八事よつうハ
家と門のちうとうぐふ中せぐきあと言ちく大事と新て御しうみ
あうとせたうぐあ山よ係て清へ重敵八川と清んぐちる日の事明
ちうぬせてさけ大事れ係せ清ハ儀ちうハ物て一日の法

必と成とまうさ兼て京都なる伊へ使をやりて是を勝とゝく
今度義氏出陣の仕と襲ひとるべく門弟とらげどうふ
せんとや送りしうそたるみを紙よ毒でもよお城へとりこ
義氏ついよ門とうそで引こしるありてよ門ゆよ属せ
給よ弟荊大義とゝのあり先ゞ事母宮をぐれとりむう
り財多ハ盗とり出妖怪あるハ盜よ悔ありとゝり七重の門よ田門
次ゞ爲とゝのうれあきぬ色人あり見ゞ山草荊大義ゞ妻
女よ人ちれば審通して女とゝ殿とめゞしつよれの色ゞ飯り
うゝて出さば大義田門ゞ有あるゝとゝく知て大よゝ
即時よ門少と去て大山より暮り義氏と敵ておゝ公主ゝを
はゝう敵くハらゝくよ門少征罷ゞ色うゝ今とれゝまゞ田門
よ近家警備と時ゝものとと去よ墨とゝひまゞゝてゝれとまの

されゝ義氏ハお伽の家来を稼寺さゝつゞゝる時義門めて
まゞたし好ど近ハ伽ゝゝん光れゝていづゝゝもまゞ
しとゝゝとひゝ安紙ゝて飢家とゆゝあゝけゝゝ
日なのゝるゝとあまゝく巡祥し出移國のゝゝて尚奥へ
修驗者相摸坊尊海とゝゝる山外人ゝ憂といのて切給ありゝて
村里ゝ人民光と崇敬ゝゝることせ動ともゝ屋義氏日ハい
ゝゝゝとあゞけゝさゝゝ人ゝれを進退よゝ決せざゝおゝ
れゞ四遠ひ山半と安物渡とゝゝゝ尊海と後て城中ふゝさ
ゝめ家運と祈ゝせ勢伯のゝあゝ自分の書文と相せゝ父て
吉西とゝふゞゝとある尊海ゝゝと辞して古ゞゝれとゝゝふ
とゝゝの人とゝく同ゝゝよゝ祈ゝふゝれゞゝゝゝと動てゝり
陸奥の者とゝく祈祷ハ絶せどゝも占ハの法ハ深く拾て施さば



そもかの古の義経はよりの出羽に入り給ひ一言の下に
決せしそもの人なり賢く業古にやりなれもまでよりと給を人とうふ
女人そもの名聞へあり八ごけ出でも俱よ此國の大人なりト神乃
武者今十枚を授むこそ絶海つくれへトとあさびとの義氏は
山伏の命つかはさるよ信と拾て占と取め黄金十枚義
俱く出と尊海先此黄金とり收めてやうく義氏の書を改と相
眼耳鼻口こまうふ相しおもより福贈して黄人あるうみとの義氏
の跡ヒ千と同郡と沼ケ一萬もふあつて大こ者ふ面色とちがくこと
ぞもあくせと高くきこん義氏うれとそめて郡のかつつを
西行の古西をうらるもぐかびやーとうよそ海郡と俱て黄ぞ
義氏れた近あのりのそとを遠ぶけひそうふいつ思しとけのみ付
尊海爲とまうめて面張の祖あるうみ人よ見とうみしこそ

うれ今日うり吉の宮参ぞさいつとしまり迷へバいつく迷へ
あらび義氏ぞうりくかうくゆそれく命数の振りハ見抵とな
たびに山桃と相そよ郷ありやと問のよ尊海云福とさるけ
作ハ死ぬと別西へ移してさけのへ今日とそびめとして毎日四方二
里の初り見びけてんとそそ家拾一のへさとうき冊の平
あるびうみびへうりきそ色のみる今日南方うそびめて東小
りそびりておのみ西とと寸嘱り俊さして俊語ハ稗して
出る義氏尊海ゲ河よまうせそ日うう南方十二所のみよひそ
みなくきびうある崗林うふ家死しおようてそびうふ
城うりうり内の日ハ東方遊び二日めハ中ふ冒めうハ西の
うる飯山のふりと新山の家こひるふくきびし家ゆきて
ひそそ海ぞしうりて生けるお渡ふん服の人ふ張家

刑部ぞう坂中務。草苅大蔵ぞうの、かの七八人の下部のこゝろ
ゑびやうあるうこたぐくあり日ごとに高山より蔵ゐる法蔵氏ん家つう
まくまぐし捕皮のとりねひりの商古力ひとりるどきよ服成
さまくしこんの人草苅大蔵。ぞう坂中務二人ぐ刀の下より法蔵刑部と
切伏りこハそもめゐるぞう組ゐやとどめの商いつりてこゝよ
まりけん乗り奥より横深田馬とえとして田川大ぞう。
酒田。山中。坂井。竹中。の七堂いづれも服巻のとよ素絶引りり
だくくと高ぶしあゝく後地とめくへて切りとり臣今も出ぐさ
とゆんりさぬ草苅大蔵。高坂中務も欲の一味とうへてくゐれん
しゐ新とゐもよ七堂の浪りさぐてひうくゐる中ゐもんを栄
深田馬ぞうふまとつきていうふ御面務四郎兵衛のつりて四運
といまぐかぎりゐりまれくめきぐゐもむよあゝしせのけんりいそ

ぎ四腹めきれいくうしさゐ進で御一族の間と見立ゐ事せ清宗ハ
伏りてゐしとそひぐけゐくつめよせしん義氏あゐりとうくゐ
清方とゐくきりの一人もゐけ進で兵場の間よ切りくんで今
をこれまでと腹すりんどふうさ切く
おゐを刀ハひりうとうゐる新よりもえうるき世とゐ左ハあうハ
くれと辞世として果のひゐ猛將のおりでいゐしきを七堂ちゐりて
四騎とそゐるよ切ゐ七堂をづりうちを地ひ川南の那中よれと立
所よ切りうと若武士の業をゐることゐりしめ堀とも飯きどうて
義氏の家乃とおて人民とゐんど切る結ぐいさゐりゐ武蔵
乃家と義氏の御金弁名庫蔵とヤせりとりそ大山の出ん和
とおきあさせ光とすれ代の屋敷とゐりけゐ

古今奇談英草紙巻四巻終